

パレ全集，第12版にみられる歯科領域の記述（3）： 第8の書，第4章および第24の書，第95章*

高 山 直 秀**

第8の書，第4章

緒 言

パレ全集，第12版において第8の書は「自然に反する腫瘍，各論」と題されており，水頭症，ポリプ，耳下腺腫に続いて，第4章にエプーリスの記述がみられる。

訳 文

ギリシャ人たちがエプーリスとよんでいた歯肉の腫瘍および突出したこぶ

エプーリスは歯間の歯肉に生じる肉の過剰発育であり，これは徐々に発育して時には鶏卵以上の大きさになる．このため唾液の湿気と悪臭をまきちらすが，会話と咀嚼は可能である．またしばしば潰瘍(chancres)に変化する．これは疼痛，熱感およびその他の合併症によって認められるであろう．またこうしたときにはその部位を手で触れてはならない．

しかし疼痛がないエプーリスは摘出することができる．摘出は2重にした糸でエプーリスをしばり，締付け，これが脱落するまで続ける．エプーリスが脱落したならば，その根本を焼灼する必要がある，さもないと再発するからである．焼灼は上に述べた溝つきの焼きごて，もし健康部位を傷付けずに適切にあてられるならば，礬油〔硫酸〕あるいは硝酸のような潜在力のある薬(potentiel)で行う．

私は非常に大きくて，一部が口の外に出ているエプーリスを摘出したが，このエプーリスのため患者の顔は見た目が非常に恐ろしくなっていた．このこぶが鉛色をしていたので，どの外科医も敢えてこれを治療しようとはしなかった．私は鉛色であること以外にはこのこぶには<問題がなく>まったくあるいはほとんど感覚がないであろうと考えた．そこで私は敢えてこれを摘出し，次いで焼きごてをあてた．患者は完全に治癒した．治療は一度だけでなく数回に及んだ．それは再び大きくなったからであり，その度に私はこぶを焼灼した．このこぶの原因となったものは歯がはめこまれている歯槽骨の小部分であり，この部分が変性し，腐敗したのであった．私はこうしたこぶが長い間に軟骨に，さらには骨に変性するのを何度となく見てきた．これらはできるだけ早期に摘出することによって治癒が得られるであろう．なぜならエプーリスが小さく，根をはっていないときには，内部に粘液質の体液しか見出せないかぎり，治療がたやすいけれども，これは徐々に硬くなり，治療が困難になるからである．

考 察

パレはエプーリスを「歯肉の過剰発育」と定義しているが，発生病理的考察はしていない．またエプーリスは摘出可能であるとし，糸でしばって脱落させるように指示しており，メスで切除することは勧めていない．パレがなぜメスの使用を勧めなかったのか，その理由は明らかではない．

* Sur les articles ayant relation à la dentistrie
qui se trouvent dans les oeuvres d'Ambroise
Paré, douzième édition (3)

** Naohide Takayama (本会会員)

第24の書、第95章

緒言

パレ全集、第12版において、第24の書は「人の発生について」と題されており、女性の生理、妊娠の診断、胎児の位置、流産、助産婦、乳母の条件、育児上の注意などが述べられている。そして本書の最後の章が乳児の歯痛に関する記述にあてられている。

訳文

乳児の歯痛

乳児にもまた激しい歯痛が起るが、それは主に歯が歯肉を突破って萌出するときである。歯の萌出は通常7カ月目にみられる。時にはそれより早いことも、遅いこともある。歯は萌出するときに掻痒感、むずがゆさ、チクチクする感じを伴う歯肉の疼痛を引き起こす。これにはしばしば下痢、発熱、てんかん、痙攣を合併し、痙攣のために時に死亡することがある。

歯が萌出しようとする兆候は、乳母が乳児の口がいつもより熱いと感じること、乳児の歯肉やほが腫れていること、またいつもよりかん高い声を上げたり、眠らないことである。さらに乳児がしばしば指を口の中に入れてこすろうとし、またよだれを多量にたらすことから掻痒感やむずがゆさのあることが知られる。

疼痛は、知覚のある柔らかな歯肉を歯が突破るときが近づくにつれて生じてくる。この疼痛を治療するためには、乳母は乳児に熱があるように対処し、いつものように乳児に乳を飲ませずに、アレキサンドリアの水薬ないしレモンやザクロの実のシロップをお湯と一緒に飲ませて、乳児の極度のかわきを取り、元気を回復させる必要がある。

しかし、萌出を遅らせる恐れがあるので、実際に冷たいものを子供の口の中に入れてはならない。そうではなく、歯肉を弛緩させ、疼痛を緩和させるために、甘いものや鎮痛剤を与えるべきである。そのためには、乳母は指に<以下の薬を付けて>頻回に歯肉をこする、甘扁桃油、新鮮なバター、蜂蜜と砂糖、オオバコの実の粘漿剤、タチ

アオイ、マルメロ (coing) の実の煎薬。そして<ほほの>外側からは大麦の粉、牛乳、バラ油、卵黄などでつくった巴布を当てる。さらに子供の歯肉を、焼いたあるいは煮た野ウサギのももで頻回にこする、なぜならこれは歯肉を弛緩させ、また歯の萌出を助けるかくれた性質をもっているからである。このことは経験から知られる。同様にブタのももも適切である。

さらに上等の蜂蜜の中につけたレクリス(reclisse)の棒を好んでかませるか、その代りにオオカミの歯をはめこんだおしゃぶりで子供の歯肉をこする。これによって子供は機嫌が良くなる。歯の萌出が近づくにつれて、子供は掻痒感とむずがゆさを歯肉に感じるが、歯肉をこすることによってそれらが弱まり消失するからである。またこうすることによって、歯はより早く萌出する。乳母は子供が遊んだり、ふざけたりするのに役立つ小さな鈴をおしゃぶりにつけるとよい。

一方歯肉が非常に硬いためにこうした処置がまったく無効であることもしばしばある。歯肉が硬い場合は歯が歯肉を突破れず、このため歯肉が緊張し、子供には極度の疼痛が起き、発熱をはじめ上に述べた合併症が生じ、遂には死亡する。

これに対して私は外科医が<萌出しようとする>歯の上の歯肉に切開を加えて歯のために通り道をつくり、歯が容易に萌出できるようにすべきであると思う。このことを私は国王陛下の待医ル・フェヴル氏、ラ・ロッシュ・シュル・ヨン王太子妃殿下、パリ大学医学部教授のオラン氏とクルタン氏、国王陛下の外科待医でパリの宣誓外科医であるド・ジャック・ギーユモ氏らのいる前で、自分の子供に行った。乳母の中には本能的に爪で歯肉を引裂いて萌出しようとしている歯に道をつくってやるものもいる。

また次の話を引用するのは不適當ではないと思う。ヌヴェールの領主殿が死亡した彼の子供を解剖するために私をよびに使をよこした。その子供は約8カ月で、1本も歯が生えていなかった。もしも子供の歯肉が非常に硬くて腫れ上がっておらず、また歯肉を切開して萌出しようとしていたすべての歯を探し出せなかったら、また人々がすこ

しでも歯が歯肉を突破るのを手助けしたとしたら、子供の死亡原因となりうることを注意深く探しても、なに一つ発見できなかったことであろう。このことから居合わせた医師たちと私は次のように結論した、すなわちこの子供の死亡の唯一の原因は、年齢の割には歯肉が余りにも硬かったためであるか、さらには年齢以上に歯肉が年老いていたためであるか、自然 (Nature) が歯肉を突破り、歯を外に押出すほど強くなかったためであると。

考 察

パレは乳歯萌出時には下痢、発熱、痙攣を伴

い、時に死亡することがあると記しており、ここでもフォシャール著「歯科外科医」の第2版、第1巻、第2章と同じくヒポクラテスの「箴言」の中の「歯の萌出について」と同様の見解がみられる。また治療法もおしゃぶりの使用をはじめ、フォシャールの記述と大同小異であり、歯肉の緊張による疼痛を治療するために、歯の上の歯肉に切開を加える必要を強調している点も同様である。

参考文献

- 1) 高山直秀訳：フォシャール歯科外科医，医歯薬出版，1984.
- 2) Ambroise Paré, Les Oeuvres d'Ambroise Paré, 12ème éd. Lyon, 1664.